【英語】

読書案内

この「読書案内」は、本学の英語科教員が執筆を担当するコーナーなのですが、これが学生のみなさんが読むべき英語の本を紹介する場所なのか、それとも英語の読書そのものを推奨しようという趣旨なのか――つまり「何を読むのか」と「なぜ読むのか」のどちらを語るべきか――、タイトル自体からは判然としませんね。いずれにせよ、おそらくは何冊もの書を挙げるのがふつうなのでしょうが、たとえその数をいくら増やしても、筆者個人の判断の枠外に出ることはなかなか難しそうです。

ことに一橋生にはもともと読書家が多く、大学での勉強とは別に、日常的に本を読んでいる様子です。ただ何年か前にある授業で、三百人程度の履修生を対象に読書に関するアンケートを取ったところ、こと小説に関しては、子供の頃はともかく、今も好んで読んでいるという声は比較的少なく、代わりにノンフィクションや実用書の類の人気がうかがえました。ましてや英語で小説を通読した経験のある人は、ほんの一握りでした。

しかし、少なくとも一九九〇年代くらいまでは、ほとんどの大学生が英語で書かれた文学にふれる機会を一度や二度は持っていたものです。というのも、小難しい文学作品――教授の研究対象であることも多く、一九世紀の大長編小説だったり、中世の戯曲や詩だったりもしました――を辞書を引き引き精読するのが、典型的な大学の英語の授業だったからです。すべての学生が、自分が将来、いつどんな場面で英語を使うかといった可能性に思いを馳せることもなく、シェイクスピアやディケンズを苦労して「解読」し、ネイティブも知らない難解な、あるいは時代遅れの語彙や、これまた日常会話で披露する機会など決してない、凝りに凝った修辞表現などを学んでいたのです。しかし英会話学校が大流行し、大学でもネイティブ英語を話す外国人の先生がコミュニケーション重視の英語を教えるようになって、実用とはあまり縁のなさそうな英語の授業は廃れていきました。仕事や留学のために海外に出る日本人が増え、また企業が実用的な英語力を備えた人材を求めるようになった時代でしたから、これは自然淘汰としか言いようのない現象だったでしょう。

こうして旧来のタイプの英語授業が必修ではなくなったことで（実際には英語だけではなく、初修外国語でも同様の状況が起こったのですが）、大学生が外国の文学作品に触れる機会は圧倒的に減りました。上で述べたように、こうした本を読んだところで、すぐに使える実用的な語学力は身につきませんが、それでも今あらためて振り返ってみて、これは残念なことだったとやはり思います。ですからここでは、「何を（英語で）読むのか」と「いかに（英語で）読むのか」という二つの問いに同時に答えるという一石二鳥を狙って、あえて筆者がこれぞと思う一冊だけを推薦し、それを材料に、なぜ大学で英語の本を読むべきかという点も、合わせて考えてみたいと思います。

Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* (1985)

筆者が一橋で英語を教えてかれこれ二〇年余り経ちますが、「英語で読む小説をオススメしてほしい」と言われてはこの本（と、その映画版）を繰り返し挙げてきました。その理由は、非常に整った読みやすい文体で、スラングや汚い罵り言葉もいっさい登場せず、学部生向けのテクストとして完璧だと思えたからです。地味ながら胸を打つ物語であると同時に、語りの仕掛けも面白く、筆者自身も何度も読み返してきました。（なお、イシグロが二〇一七年にノーベル文学賞を受賞したことで、彼の作品を読んでみたいという人が増えたようです。）ですが、近年になってイシグロ自身が回顧的に語ったコメントを読んで、作品に対する解釈が変わってきたのです。

いつかみなさんが実際にこの本を手に取る可能性を考えて、詳しいことは書きませんが、あらすじをざっと紹介しましょう。舞台は第二次世界大戦後の英国。ダーリントン邸で長年執事を勤めてきたスティーブンズは、この屋敷を使用人ごと購入したばかりの新しい雇い主の勧めもあって、人生でおそらくほぼ初めての小旅行に車で出かけます。その目的は、かつて彼の下で女中頭を務め、結婚して辞めていったミス・ケントン（今ではミセス・ベン）を訪れ、再び屋敷で働くよう説得すること。旅する彼の脳裏によみがえるのは、敬愛していた元の主人、ダーリントン卿が健在だった頃の忙しくも活気ある日々、同じく屋敷で働いていた老齢の父親や、仕事上ではたびたび彼と衝突しながらも好意を寄せてくれたミス・ケントン、あるとき屋敷で秘密裏に開催された重要な政治集会のことなどです。小説は老年に差し掛かったスティーブンズを語り手とし、現在進行中の旅の道中に起こる出来事と、まだ若かった戦前の日々の思い出とが交互に語られます。

まず、冒頭の部分を見てみましょう。

［原文］

It seems increasingly likely that I really will undertake the expedition that has been preoccupying my imagination now for some days. An expedition, I should say, which I will undertake alone, in the comfort of Mr Farraday's Ford: an expedition which, as I foresee it, will take me through much of the finest of England to the West Country, and may keep me away from Darlington Hall as much as five or six days. The idea of such a journey came about, I should point out, from a most kind suggestion put to me by Mr Farraday himself one afternoon almost a fortnight ago, when I had been dusting the portraits in the library. In fact, as I recall, I was up on the step ladder dusting the portrait of Viscount Wetherby when my employer had entered carrying a few volumes which he presumably wished returned to the shelves.

［訳］

ここ数日ほどすっかり私の頭を占めていた例の遠征ですが、実際に行く運びになる見込みが日に日に増しています。というのは、ファラデーさまの快適なお車をお借りして私一人で出かける遠征であり、イングランドの最も美しい地方を抜けて西部地方に向かうにあたって、ダーリントン邸を五、六日は空けることになろうという遠征です。そのような旅が着想されましたのは、念のため申し上げておきますと、およそ二週間前のある午後、書斎にかかった肖像画たちの埃を払っていた私にファラデーさまご自身がお申し出くださった、非常に寛大なご提案からでした。正確に思い出すに、私が脚立に乗ってウェザビー子爵の肖像画の埃を払っていたところ、旦那さまが棚への返却をお望みと思しき何冊かの本を抱えて入って来られたのでした。

原文を見ると、まず一文目はいわゆる It~that 構文になっていて、二文目では an expedition which に導かれる名詞節が二つ、同格で並置され、それぞれ “I should say,” “as I foresee it,”が挟み込まれることで中断されています。まさに大学入試の英語試験にぴったりの文法ポイントが豊富で、読解や和訳の問題がいくつも作れそうな一節です。しかしよくよく見ると、これは非常に手の込んだ、一筋縄では行かない文章でもあります。

まず、これは一人称の語りなのですが、それでいて「私」を文法的な主語とするのは、四つめの “In fact, as I recall, I was up on the step ladder dusting the portrait of Viscount Wetherby . . . ”という文が初めてです。最初の三文では、「私」は上記の“I should say,” “as I foresee it”という挿入節や、“an expedition which I . . .”といった従属節のなかに現れるのみです。それまでは文法的にも「後ろに控えて」いた語り手が四つめの文でついにスポットライトを浴びる瞬間、彼は書斎で脚立の上に立ち、貴族の肖像画の埃を払うという、いかにも「執事らしい」ポーズを取っているのです。この少々あざとい「演出」と同様、全体の語りもまた、単に丁寧で回りくどい言葉遣いであるだけではなく、構成の上でもきわめて技巧的で、決して素直で自然な心情の吐露などではありません。この不自然な語りの一つの理由は、執事という存在が、おそらくもともとは労働者階級の出自でありながら、上流階級の言葉遣いと所作を表層的に真似る、いわばロボットのような存在として設定されているからです。（実際、英国の小説やテレビドラマにはこうした半ば戯画的な執事がしばしば登場しては笑いを誘いますが、イシグロは、本作の執筆にあたって調査を行ったところ、現実の執事の職務内容などについてはほとんど歴史的資料が見つからなかったので、自分で細部をでっち上げたと語っています。）

しかし、それだけではありません。読み進めて行くと、この冒頭で語り手スティーブンズが取っているスタンス、つまり物語の前面にしゃしゃり出ることを嫌う、奥ゆかしく生真面目な従僕としてのスタンスは、彼にとっての「隠れみの」として機能していることが分かってきます。作中でスティーブンズはいくつかの重要な決断を迫られるのですが、自分の人生に大きな意味を与えてきた

人々をあえて押しのけるようにして、彼は執事という仮面の後ろに逃げ、真摯に人と対峙することを嫌い、何より自分自身の心と向き合うことを避けるのです。

老境に入った今、何十年かぶりに会うことになるミス・ケントン——彼が心中で彼女をこう呼び続けていることも、ロマンチックなようでいて、やや病的な現実逃避の表れとも取れるのですが——の住む街に向かって旅するスティーブンズは、過去のふるまいを反省的に振り返る素振りを見せながら、どんな時でもひたすら職務を全うした自分を結局は許し、正当化し続けようとします。それでも、日本人の読者であれば、高潔とは言えないにせよ、頑迷なまでに「執事道」を究め、滅私奉公に徹するスティーブンズに、昔ながらの不器用で愚直な日本的職業人を見い出しもするでしょう。（長崎で生まれて三歳でイギリスに移住したイシグロが、英国人の主人公にそうした人物を投影することも、十分あり得そうです。）またジェイムズ・アイボリー監督による映画版（1993 年）は、アンソニー・ホプキンズとエマ・トンプソンという二人の名優の見事な演技により、大戦に向かう英国の美しい田園風景を背景にすれ違う大人の男女の心を描いた、切なく臨場感のある人生ドラマになっていました。

しかし驚いたことに、イシグロは二〇一五年のある対談において、スティーブンズを「一種の怪物」と断じたのです。彼はこう述べています。「すべての怪物が連続殺人犯で、気が狂っていて、危険であればいいのですが、そうではないのが問題なのです。恐ろしいことに、頭の中で自分はなんとかうまくやれているんだ、正しいことをやっているんだと思い至った人たちの内側にも、怪物がいるものです。」それを「正常性の中に、人間性の中に潜む怪物性」と表現したイシグロの念頭にあったのは、ユダヤ人の大量虐殺を先導したアドルフ・アイヒマンを評してハンナ・アーレントが用いた「悪の凡庸」のイメージだったかもしれません。（実際、見当違いの義侠心からナチスに共感したダーリントン卿に、身寄りのないユダヤ人の若い女中たちを解雇するよう命じられたスティーブンズは、これを黙って実行しています。）自身の仕事が及ぼしうる政治的または倫理的な影響には目を向けず、与えられた小さな持ち場だけを守っていたいという気持ちは誰しも持つもので、そうした傾向を「化け物級に」誇張した存在がスティーブンズだ、といったことをイシグロは述べています。

とは言え、作品に関する作者の発言なんてあまり当てにならないし、必ずしも鵜呑みにする必要はなく、これも一つの解釈と考えればよいでしょう。実際、スティーブンズに対して最初からそのような感想を抱く読者よりも、（以前の筆者がそうであったように）むしろ深い共感を覚える読者のほうが多いのではないでしょうか。なぜなら、スティーブンズのもっともらしい、持って回った語り口には、ある種の強迫的な説得力があるからです。それでいて、冒頭で見たように、その人間性にそこはかとない違和感を抱くように読者を仕向ける工夫が、小説の随所に仕掛けられているのです。よくよく読めばさりげない場面にも垣間見えるスティーブンズの空疎さからは、単なるワーカホリックの朴念仁のそれではない、非現実的なまでの思考停止ぶりと想像力の欠如が感じとれます。

どんな人間であれ、それぞれ自分の中にどうしても見たくないものを持っていて、それゆえに心のなかにあえて「死角」を作り出しますが、すぐれた小説は往々にして、その存在を遠くの灯台のように、チカチカと知らせてくるのです。人は常に世界を自分に都合よく歪めて捉えつつ、そんな自分を肯定し、容認しているもので、これは古今東西変わらないでしょう。イシグロは、スティーブンズに普遍的な人間の弱さやずるさを体現させながら、それに冷たい非難の眼差しを向けるのではなく、容易には抗いがたい人の性を、おそらく自戒を込めて、また大いにユーモアも交えて、描いています。そのように、人の無意識の心の動きをあらゆる角度から眺め、「認知の歪み」までをもとことん緻密に、かつ寛容さをもって描き出すことができるのは、とりわけ小説だけではないでしょうか。

では、それをあえて「原語で」読むべき理由は何なのか。確かに、一般的に名作と呼ばれるような小説は世界中の言語に翻訳されていることが多く、原語を知らない読者にも大きな感銘や楽しみを与えてくれます。ですが、まず外国語の文章を読むことの一つの効果は、私たちを取り囲み、その思考の範囲を知らず知らずのうちに限定している言葉という透明な檻が、外国語では可視化される瞬間があるということです。一つの文化と歴史を背負った語彙と、その言語独特の文法を用いた文章や発話は、複雑で多層的な意味の体系を構築するのであり、たとえすぐれた翻訳であっても、これを十全に伝えることは不可能です。構成や時制、視点などにも工夫を凝らした小説であればなおさらそうだということは、先に引用したイシグロの作品の冒頭部と和訳を読み比べてみれば分かるでしょう。（和訳の方では、くどいまでの敬語の使用が語り手の謙虚な態度と従属的な地位をはっきりと表していますが、もともと文の主語を割愛することが自然な日本語では、上で解説したような形で、人物の人格や態度を文構造から示すことはできません。）母語は私たちの意識そのものを形作っていますが、個々人の心に独自の死角があるように、個々の言語にもまた、それが認識できない、またはしたくないがゆえに表現し得ないもの、思考を内側から阻むものがあります。だとするなら、異国語で書かれた文学を四苦八苦して読むことは、そうした二重の「罠」を突破し、思考を解放するための、唯一の方法であるかもしれません。

The Remains of the Day は本学の附属図書館で読むことができます。また一橋では、英語教員が担当する「教養ゼミ」、「古典講読」などの科目で文学作品を扱っているものがありますので、ここまでの主張に多少なりとも説得された方は、ぜひ履修してください。

（書き終わってから気づきましたが、この文章が置かれる「外国語履修案内」のページには、「読書案内：その言語を学びながら並行して読むと楽しいお薦めの本の紹介」という説明が書いてありました。）